

建設経済常任委員会県外行政視察研修報告書

建設経済常任委員会では、令和4年5月16日（月）～18日（水）の3日間の日程で、岡山県倉敷市、岡山県奈義町、兵庫県福崎町を視察してまいりました。参加者は、石原孝明委員長、笹沼昭司副委員長、永井孝叔委員、石岡祐二委員、角田憲治委員、執行部職員2名、事務局職員1名です。

最初の視察先である岡山県倉敷市では「観光プロジェクト」について、2日目に訪問した岡山県奈義町では「過疎自治体が出生率トップ級になったインフラ整備の取り組み状況」について、3日目に訪問した兵庫県福崎町では「特産品による町おこし」について、それぞれ研修しました。

岡山県倉敷市

○『観光プロジェクトについて』

5月16日（月）は、岡山県倉敷市を訪問しました。

倉敷市は、面積355.63 km²、人口478,769人、県の南西部に位置し、東は岡山市に隣接し、南は瀬戸内海に面しています。水島地区を中心に広大な臨海工業地帯が形成されている西日本有数の工業都市になります。また、山陽自動車道・中国横断自動車道・瀬戸中央自動車道（瀬戸大橋）など高速道路網が交差しており、拠点性も近年向上しています。また、白壁の建物や柳並木が美しい倉敷美観地区のある「倉敷エリア」をはじめ、日本有数の工業地帯である「水島エリア」、瀬戸内海国立公園の美しい内海広がる「児島エリア」や港町として栄えたノスタルジックな街並みを残す「玉島エリア」、マスカットやスイートピーの一大産地である「船穂エリア」など個性豊かな地区により形成されています。

多くの観光客が訪れるのが、「倉敷美観地区」です。古来より運河として利用されていた倉敷川沿いに立ち並ぶ白壁土蔵のなまこ壁に、軒を連ねる格子窓の町家、これら歴史を感じさせる建物が商業利用され、観光客達をもてなしています。この周辺一帯は1979年に国から「重要伝統的建造物群保存地区」に指定されております。

倉敷市では、平成 16 年に「倉敷市観光振興アクションプラン」、平成 28 年にはその後継として「倉敷市観光振興プログラム」、そして、平成 30 年 7 月の西日本豪雨や新型コロナウイルス感染症の影響による観光客の減少、SDGs を踏まえた取組の推進、感染症を契機とした新しい生活様式による旅行スタイルの実践など観光を取り巻く環境が大きく変化したことから、第 2 期計画を令和 3 年に策定し、持続可能な観光先進都市・倉敷を目指して、様々な観光施策を戦略的に展開しています。

その中において重要課題として捉えているのが、滞在時間です。近隣の関西圏からの観光客が大半を占めることから、滞在時間は 3 時間 40 分ほど、この滞在時間を延ばすための取組みが課題となっており、今年度は、二次アクセス対策として倉敷美観地区と児島地区を結ぶバスの運行を試みる計画があるとのことでした。

このように、「倉敷市観光振興プログラム」に基づき、組織的かつ計画的に施策を展開している倉敷市の事例を視察して、本市の観光振興を推進していくためには、その指針となる計画策定の必要性が重要であることを改めて感じました。

倉敷市 研修風景



岡山県奈義町

○『過疎自治体が出生率トップ級になったインフラ整備の取り組み状況について』

5月17日（火）は、岡山県奈義町を訪問しました。

奈義町は、面積69.52 km²、人口5,768人、岡山県北部の鳥取県との県境にあり、基幹産業は農畜産業、大豆栽培などがあります。平成元年には7,879人いた人口が27%も減ってしまいました。高齢化率は35%で、奈義町の最大の課題である人口減少を留めるため、若者の定住施策、就労対策、独自の子育て支援策を積極的に進めてきました。そのため平成26年には合計特殊出生率が2.81、令和元年には2.95を記録しています。そのため、人口維持に向けた町づくりを参考にすべく視察しました。

定住化に向けた住宅施策では5つの町営分譲地87戸を造成し、新築住宅建設では100万円の補助付けている。また若者向けに町営賃貸住宅を建設しており、財源には国の交付金や過疎債を活用しています。現在は民間分譲地整備に1区画100万円を補助しているほか、新しい住まいのエリア整備を行っていました。企業誘致では工業団地を造成し、完売して16社が入っていました。

また、就労の確保ではスマホのライングループを町民主体で法人化（一般社団法人しごとえん）して、ちょっとだけ子育てしながら働きたいなどの希望をかなえる受け皿作りがしてありました。

子育て支援では「子育てするなら奈義町で」のスローガンが懸垂幕で庁舎に設置され、町制要覧も大半のページに、写真イラストで子どもが登場するなど、子育て支援施策が充実していました。年間13.5万円を3年間支給する高校生の就学支援、就学が困難な大学生には4年間に240万円を貸与し、卒業後町内居住で半額免除の奨学金、児童の学校給食費を概ね半額にする小中学校での学校給食費の食材購入費の助成、更に「なぎチャイルドホーム」という、放課後児童クラブ、乳幼児の親子の集い、高齢者も参加して子育てサポートを行うなどを兼ね備えた、子育てが楽しくなるような広場があり、B&G財団の補助金が入っていることには驚きました。

また、商工の施策ではスマホ決済や加盟店でチャージして使えるナギフトカードという電子マネーがあり、行政ポイントや買い物ポイントの利用、プレミアム商品券や給付金の交付などにも使われていました。

高い合計特殊出生率のカギは、住む、子育て負担軽減、子育ての悩み相談、町のみんなが子育て応援してくれるなどの「安心感」だということでした。

奈義町 研修風景



兵庫県福崎町

○『特産品による町おこしについて』

5月18日（水）は、兵庫県福崎町を訪問しました。

福崎町は、昭和31年に旧福崎町、田原村、八千種村の1町2村が合併して誕生した町です。県の中央部に位置し、面積45.79 km²、人口18,742人で、市の60%を農地と森林が占めており、気候は、瀬戸内海型気候に属し、比較的穏やかで温暖な気候であります。

交通の立地としては、中国縦貫自動車道と播但連絡道路が交差する福崎インターチェンジを有し、物流の拠点となる立地条件を活かし3つの工業団地で45社が操業しており、近郊都市的な発展を遂げています。

歴史的には明治時代に郡役所が設置され、生野銀山から姫路港までを結んだ日本初の高速道路といわれる「銀の馬車道」が通り、政治・経済の中心地として栄えたまちです。

福崎町の特産品であるもち麦は、高ミネラル、高たんぱくでビタミンBも多く含まれ、食物繊維の一つである「ベータグルカン」が豊富で、コレステロールを低下させる働きがあるとされており、加えて、「がん」の発生や再発を抑制する働きがあるとされています。

福崎町では、昭和30年代までもち麦が栽培され、主にだんごにして食べられていました。その後、栽培は途絶えましたが、昭和58年に町の特産品づくりを考える中で、もち麦を復活させることとなり、昭和61年からもち麦の栽培に取り組み、同時に商品開発も行い、昭和63年に「もち麦麺」が

完成し、本格的なもち麦栽培が始まりました。

平成2年には、町、商工会、JAが主体となり、第三セクターによる「株式会社もち麦食品センター」が設立され、また、平成3年には個人農家、営農組織などからなる「もち麦生産組合」が設立、そして、平成7年に特産館「もちむぎのやかた」がオープンし、特産品であるもち麦の生産から製造、販売、消費までの流れが確立され、商品としては、もち麦麺のほかに、もち麦精米、もち麦茶、もち麦どら焼きなども開発され、現在に至っています。

平成25年にはNHKでもち麦が紹介され、健康ブームと相まって需要が大幅に増加し、それに合わせて作付面積も増加し、現在も毎年40ヘクタールほどを作付けしています。

町では、もち麦を核としたまちづくりとして、もち麦フォーラム、もち麦祭り、もち麦料理教室、小学生を対象とした食農教育などの取り組みを行っており、もち麦が町の特産品として定着されています。

研修当日も、もちむぎのやかた内にあるもち麦を使用した食事を提供するレストランは大盛況で、入店を待つ多くの人で賑わっていました。

今回の視察研修においては、さくら市としても、特産品によるまちおこしに向けて、非常に参考になる研修であったと感じました。

福崎町 研修風景



※すべて写真撮影時のみマスクを外しています。

以上、建設経済常任委員会は、岡山県倉敷市、岡山県奈義町及び兵庫県福崎町について行政視察を実施しました。観光振興、子育て支援に向けたインフラ整備の取り組み、特産品によるまちおこしなど、さくら市として今後取り組むべき事業に向けた、たいへん参考となる行政視察となりました。